

視覚障害者の自己形成過程の分析  
- 結婚、出産、子育てに注目して -

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
発達・福祉臨床クラスター  
宮江 真矢

本研究は、視覚障害者の子育て支援の視座を得ることを目的とし、視覚障害者の自己形成過程を5人の妊娠、子育て中の視覚障害を有する女性の語りから分析を行った。また、早期受障者の子育ての意味や、中途受障者の子育てと自己の再統合の関連についても検討した。

早期受障者は、自己形成過程における視覚障害児・者としての自分に対して自問自答を繰り返し、社会の中で、自分とはどのような存在なのか、何に貢献できるのかなど、多くの問いにぶつかりながら「視覚障害」と自分を統合してきた経緯があった。視覚障害者にとって、多くの物理的な困難がある「子育て」を選択することは、これまでの人生において、多くの「障害」を乗り越えてきた自信と、これからの人生をより豊かにしていく希望の表れであり、人生における過去、現在、未来を肯定するものとして、大きな意味を持つに至ることと推察できた。

一方、中途受障者は、子育て中に「視覚障害」となり、「見える」世界から「見えない・見えにくい」世界に移行し、これまで培った生活スキルの見直しを迫られ、障害を乗り越えていく時期、すなわち、自己の再統合の時期と子育ての時期が重なっていた。人生において「視覚障害」は想定外であり、自分の子育てを含む人生設計図を上書きしていく作業が求められる中、同じ視覚障害者の「仲間」と関わることで、中途受障者でしかわかり得ない、膨れ上がる辛さを手放すことができ、さらに「仲間」の生き方や経験は、ある程度の自分の将来の見通しをもたらすことがわかった。また、「仲間」と同じく子どもの存在も中途受障者の自己の再統合を促す「力」となることが示唆されたが、受障による子供への否定的な影響もあることなど、親と子の人格的な関わりが「障害」をより複雑にすることも示唆された。

視覚障害を有する親の心理は、子に影響し、子の心理は、子の子にも影響していく。何世代にも継承される遺伝子もまた、断ち切ることはできない。視覚障害者には機能的な問題でできないことは確かにある。しかし、親としてできないことに注目するのではなく、親としての姿勢に注目しなければならない。子育てを誇りに思っている親の姿をどう子どもに感じてもらうか、またはどう伝えていくかが大事である。人間としての価値や多様性の伝達を支援することこそが、未来へと続く世代間という時間軸へのアプローチといえるのではないだろうか。